



—呼び起こされる記憶の断片。

薔薇窓の元、眼下遠く、海から姿を現したいつかの私が見える—

生温かい海風が吹き抜けると、石畳はその色を一瞬和らげた。風はゆっくりと上を目指し、崖の上に佇む灰色の塔へ辿り着く。塔の上には鋼鉄の薔薇窓が鎮座し、港を見下ろしていた。人が出入りしている姿は一切ないが人影が窓辺に映ることがあるとの噂が絶えず、畏れられていた。

ある朝、未だ夜が白み始める頃、薔薇窓は少しづつ右へ回転を始めた。寝静まった街は、その微々たる動きと軋む音に気付かない。窓の隙間から海風をはらんだアロマティックな香りが塔の中へなだれ込む。儂い命を僅しい刹那へ変えてくれるような香り。

私の名はアレクト。この塔へ幽閉され何百年の時が過ぎたのだろう。精気を失った私の姿は醜くやつれ、契約により失った声は自分でも思い出せなかった。やっとの思いで開いた薔薇窓から香しい外気を感じることで、こうして正気を保っている。

「誰かあの人に伝えて欲しい。私は必ず生まれ変わると。」



アレクトは動かない脚から剥がれ落ちてしまった鱗(うろこ)を薔薇窓の隙間に、1枚ずつ丁寧に貼っていった。薔薇窓はいつしか美しい瑠璃色に輝き、神秘の香りを放ち始めた。アレクトは黒曜石のような目を煌めかせて、窓の隙間から薄れてゆく月を見つめた。想いをつなぐのだ。中世から次の時代へ。

その夜、海に潮が満ちる頃、彼女は泡となり、塔から人影は消えた。

#### 【掲載製品】

■ ANGELA CIAMPAGNA 「HATRIA(アトリア)」 オードパルファム 100mL ¥25,000+税 / 株式会社大同 tel.03-3666-3125 ※2016年9月1日(水)発売



この記事が気に入ったら  
いいね！しよう

いいね! 925

最新情報をお届けします